く澄んだ聲を聞きつけると、自分の方から歸つて來る。

こんなに澤山の象が、人間の仲間入りをするのをこんなにも樂しみにしてゐるといふ事は、たしかに注目に値すると思ふ。たしかにこれは、我々人間の中に、平素は隱れ潛んでゐても何か彼等を惹きつけふ、やさしい德性がある證據だと思つた。あの大きな圖體をした象も、やはりさういふ人なつつこい動物の一つだつたのである。

前に我々が訪問したあの風通しのよいジャングルのお宮の主人である監督が、我々の方へやつて來て『お早う』と聲をかけた。汗だらけのヘルメット帽を被つた若いシャム人である。足にはまだ新しい黑のエナメル靴を穿いてゐる。ジャングルのまつ只中でエナメル靴とは贅澤だと思つたが、多分これは、ラムパンの市場街で此の青年のアジヤ的な眼をひきつけた品なのであらう。然し、そのために或ひは一ケ月分の俸給をふいにしたかも判りがたいのである。

私は、放牧の象が逸走するやうなことは無いか、と訊いて見た。ないといふ。勿論折々は自分で迷子になる場合はあるが、直きに見つけ出せる、といふのは、象が踏つけたジャングルの中の足跡さへ辿つて行けば、必らず見つけ出せるのださうだ。

だが、こんな話もある。つい去年だつたか、シェンマイ附近のジャングルで、やはり老練な強力の象が一頭ふいと見えなくなつたと思つたら、それつきり、二度と戻つて來なかつたと云ふ話だつ

た。明かにこれは、此の老象がチイク材の運般仕事に飽きが來た證據であらう。尠くとも三、四十年此の山地で働いてゐたといふから、どんな隘路でもジャングルでも、部落へ行く道から谷の淺瀨の一々まで、細大洩らさず記憶してゐた筈である。從つてまた、およそ何時頃に、農民たちが畑のものをシェンマイの市場街へ賣りに出るか、なぞもちやんと心得てゐた。そして、てうどその時刻にひよつこり、大きな耳朶をふり、長い鼻をつき立てゝ通路へ立ち塞つたものだから、農民たちはびつくりして、擔いだ籠をおつぽり出して遁げ歸つたのである。籠の中からは、バナナ、砂糖黍、いろいろな果實、野菜、米、等がザクザクと轉げ出す。これは放浪の象に取つて、あまりにも素晴らしい朝飯の御馳走だつた。――と、此の青年監督は、象の逸話をこんな風に話してくれたのである。

こんな事があつてから約一ケ月といふもの、勿論人間に危害を加へるやうなことは無かつたが、巨象出沒の噂が附近一帶を不安にした。そこでよく馴致した象を使つて彼を捕へやうとすると、まるで老練な追剝みたいに稼ぎ場を變へてしまつて、どうにも始末が悪いのである。

ところで、何と云つても象は貴重な動物であるから、どんなに骨を折つてでも生捕りにせねばならないといふので到頭妙案が考へだされた。よく馴らされた象の一群によつて包圍させ、つひに隱れ場所のジャングルから誘ひ出すことに成功したのである。既に柵の構へも出來てゐた。竹の杭を地面に叩き込んだ頑丈な柵である。首尾よく追ひこめられた老練の働き者の巨象は、これでもう脫

出することを諦めたやうだつた。

何しろ、一番働き者の大象が再び歸つて來たのだから、チイク伐採の人夫たちは大した喜びでお祝ひの酒宴を張つた。ところが、その酒宴がまさに酣に達した頃、一人の少年馭者が飛びこんで來て息も絶々に報告した。巨象は竹垣を踏み蹈いて、包圍の、よく馴らされた象群を引連れて復び脫出してしまつたといふのである。それ以來、此の巨象の姿は二度と見られなかつた。恐らく、北ビルマの山中へ行つてしまつたのであらうといふ噂だ。

『何しろあんた、一萬二千チカルはする立派なやつでしたよ』と、その若い監督は泌々と殘り惜さうに話を結んだ。一萬二千チカルといふと、ざつと一萬二千五百圓である。

カムボジヤ王の火葬

瀟洒たる沿岸航路の小汽船が、愛想のいゝデンマアク士官の指揮下に、シヤムとカムボジヤ間の交通を媒介してゐる。汽船の碇泊するレエム港は、複雜極まりない南海特有の地形を示して、蜃氣樓の如く紺碧の海につき立つてゐる。此の樂園のやうな土地が卽ち、胡椒の木の茂る畑だ。レエムから出發する甚だ便利なフランスの郵便自動車は、素晴しい鋪裝道路を走つてカムボジヤの首府プノムペンと連絡する。プノムペンはフランス領事の駐在地であるだけに、土着の市民でも教養のある者はみな、魅力のあるフランス語を流暢に話す。例のアンコオルの名高い廢趾は、此のプノムペンからたつぷり一日行程のジヤングルの中に、埋もれてゐるのだ。かつて千年の昔、世界最大の規模と莊麗とを誇つた建築の名殘りである。その創設者はチヤム及びクメルの二代の王だつたが、その後裔である息子たちは今日、ラ・マルセイユ(佛蘭西の國歌)が聽えると敬禮をやつてゐる。

プノムペンそのものは、完全に歐風化した優美な小都會である。イギリスが何處へでもヤソ教の教會を擔ぎこむ如く、フランスは自國の植民地へは片端から喫茶店を移植し、大理石の丸卓子を往來まで持出したり、食器棚にはまたどぎつい色硝子の酒瓶を並べ立てたりする。

プノムペンは、私の訪れた日は狹隘な市街に人がありあまる程溢れてゐた。カムボヂヤ王シソワトの遺骸が、荼毘に附せられる日の前日だつたのである。

正五時、數臺の自動車が走つて來た。金ピカの禮帽を戴いたフランス總督が、やゝかたくなつて嚴肅に、眞先に降車する。續いて王家の一族がこれも金ピカの外套を着流して車を降りる、貴族、僧侶、高位高官の朝臣たち。非常に氣品のある支那人が二三名、高齡のせゐかやゝ前蹈みに立つてゐる。うすい長い髭をつけ白と褐色の絹布を纏うてゐた。樂隊がラマルセイユを演奏してゐる。祭儀が始まつたのである。

故王の遺骸を燒くために新設された莊麗なお堂へ、まつさきに進み入るのが、高位高官や貴顯紳士。後からゾロ〳〵と續く官吏、市民もみな一樣に純白の喪服である。その間に交つてゐる黃ろい

法衣の一團は、いふまでもなく僧侶である。かういふ嚴肅な行列が一時間以上も續くのだ。

火葬執行のお堂の中央に聳えるピラミットの上に、逝去したカムボヂャ王の遺骸を入れた壺が祀つてある。壺に續く急な大階段を、やはり二時間位も、白衣の會葬者が間斷なしに上下してゐる。各自に白檀の一片を捧げ、短かい默禱の後に壺の臺石の上へ置く。大部分の會葬者は敬意にあふれた叮重なお辭儀をするだけだが、中には古式どほりの跪拜をする人も相當見受けられた。祭壇のピラミットの足もとには、黄衣を纏うた僧侶の一團が長まつてゐる。たえず祈禱を口の中で誦し、手には、上の壺に結びつけられた經文を捧げてゐる。

お堂の周圍には、入場を許された群衆が押し合ひ、その外側の垣にはまた、黒山の如き群衆がズラリと顔を並べてゐる。みんな死んだ王様に最後の御挨拶をしたくて駈けつけて來た市民だつた。

カムボジャ王シソワットが、高齢をもつて逝去したのは半年前のことである。爾來今日まで、遺骸は、國王用の壺に納められてゐるのだが、これはクメル王一族の時代から、代々の王がその遺骸を託して來た傳統の遺い壺である。逝去した王は、勿論すでに名のみの主權者で、實際は諸侯の境遇に置かれ、國内にはフランスの三色旗が既に早く飜へつてゐた。一族の王領采地もフランスに押へられたばかりか、王冠に佩用する寶石の類までも博物館に保管されて、僅かに特別の機會に限つて貸出されるといふ有樣だつたのである。

クメル王家累代の屍壺は金鍍金が施された全面に見事な飾りがついてゐる。蓋は王冠に似た紡錘

型で、全體の感じが佛塔に似て、高さはきつちり二米はあらう。然し壺の内部の容積は見かけ程大きくなく、高さ八十糎、はゞ五十糎ばかりだが、これでも、膝を組んで踞ませるとすれば、屍體一個を納めるには十分であらう。

王の遺骸は、此の壺の中に數ケ月間納められてゐるうちに木乃伊になる。壺はそのまゝ寺に納められ、階段式の祭壇の上に安置される。祭壇にもいろいろな花、古代支那の陶器、燭臺、佛陀像、その他各種の寶物が飾り立てゝある。安置されてゐる間、毎日毎日、黄衣を着けた僧侶が祈禱を捧げる。音樂も奏でられる、これは屍壺の中の王が退屈しないためである。靈魂がまだ現世に在るかぎり、慰さめてさし上げねばならないのであらう。だからして、花も、植木鉢も、獨得な趣向を凝らして、毎日新しく取替えて祭壇を飾る。一方、壺の中に在る王の靈は、日毎に、澤山の王子や王女たちの、妃や知人や從臣たちの、渝らぬ愛情と忠誠との確證を得なければならない。かくて、夜を日についで幾百本の蠟燭が灯され眞鍮の燭臺が不夜城の如く輝くのである。

星占ひの僧たちはまた、屍壺の前に跪坐して大汗を流してゐる。王の靈に應へ奉る彼等の責任は最も重大なのだ。即ち、壺の中に安置された王の遺骸は、何月何日の何時に燒いたらよいか、といふ算定をするのが彼等の任務であり、それによつて萬端の準備も調へられるのである。

火葬の嚴肅な儀式のために新しく建てられるものは、單に火葬堂だけでなかつた。一國の王にふさはしい複合體の寺院を建設する必要もあつた。要塞化された都市の城壁に似た墻壁、美しい端麗

な黄金門が四つ、藝術味の豊かな臺座の上に聳え立つ王族揭揚の檣の幾つ。宏大な内苑、第二のお堂を建てる前庭、等々、何から何まで支那式の設計である。此ほかにも尙ほ、舞踊場としての廣間高貴の賓客を迎へる接客室、僧、料理人等の居間と設備、影繪芝居の舞臺等が設計されるのだ。

これには莫大な資金のいることは勿論である。一切で、尠くとも五十萬圓はかゝらう。だが、苟くも一國の王の名にかけて、それにふさはしい靈廟が建てられねばなるまい。尠くともクメル王族の直系を葬らふのに、苦力のやうに簡單に燒いてしまふことは出來ない筈だ。

儀式は次ぎから次ぎと、もうまる一週間も續行されてゐる。何れも長つたらしい勤行と祈禱をもつて始まるものだつた。やがて、王の遺骸を納めた黄金の屍壺が、嚴そかな行列によつて火葬堂に護送される。此の行列には約三十頭の象が加はるが、何れもクメル時代の古めかしい服裝をした少年馭者によつて曳かれてゐる。數週日もかゝつて遙々、チイク材を運んでゐた原始林から首府へ徵用されてきた象群だつた。これだけでも相當の費用がいる。象一日の給銀だけでも莫大なものである。チイク材を扱かふ商社は、クメル王家の葬儀に對して何等の關心も敬意も抱いてはゐないから大切な業務用の象を三十頭も、長期にわたつて提供する以上、損のないだけの報酬は當然請求するのである。

再び連日にわたつて祭儀の勤行と祈禱の練習が行はれる。一方では、既に木乃伊化した遺骸から筋肉の部分がそぎ取られ、隱密の裡に荼毘にふされる。從つて、火葬用の棺に移された時は、既に

骨だけになつてゐるのだ。これで、クメル王家に傳來する黄金の屍壺は、再び博物館に返還されることになる。私が參觀した時には、此の屍壺はカムボジャ王歴代の黄金の王冠と並んでゐた。王冠は上が尖つてゐて、寶石をちりばめた腕環や、同樣な眉間を飾る鉢當ても一緒に置いてあつた。これ等はみな、前にも云つたとほりフランスが管理してゐるのである。

王の遺骨を燒く火葬場のお堂が、塔のやうに高く立派につき立つてゐる。古い素燒きの土器のやうに赤く、これにも黄金の裝飾が施してある。内部には鈍い金絲の刺繍をした白布が一面に張りめぐらされてゐる。此のお堂は四面とも壁がない。市民は、垣の四面に設けられた狹い高い通用門から、白と金の階段の上のピラミッドに安置された骨壺を拜むことも出來るし、その前に長蛇の列を作つて跪拜し、低頭してゐる夥たゞしい會葬者を眺めることも自由である。設計も構成も、萬事手ぬかりがなくて天才的だつた。假りに歐羅巴の建築家にまかせても、到底これ以上の效果を擧げることは不可能であらう。婦人の會葬者團が階段に溢れてゐる。みんな白い喪服であるが、短かい袴の下から栗色のふくらはぎと同じ色の素足が出てゐる。さすがに婦人たちの方は正統派らしく、古い儀禮どほりて靈前に跪づくことを忘れないやうだ。默々として、典型的な秩序の中に果しない會葬者の、告別の行列が次々と解體されて行く。此處には、交通整理人も警官も不要だつた。

やがて、一旦、骨壺の前が空虛になつた。廣い祭場内に森嚴な緊張が溢れる。さつきまで、潮の

上下のやうにざわめいてゐた數千の會葬者が、今は咳一つなく靜まり返つた。

ふと、何か意味のない空洞な音が靜寂な空氣を搖がした。法螺貝を吹くやうな音響だつた。同時に白い噴煙がむくむくとお堂の中央から捲きたち、殆んど堂内を埋めつくした。今にも、此の莊麗な堂宇全體が炎上しさうな勢ひである。私は固唾をのんで、今にも恐ろしい破局が來やしまいかと見つめた。だが、次第に白煙は收まり、莊麗なピラミッドが再び見えてきた。だがさうだつた。やはり一條の白煙が、今度は骨壺から輪を描いて立ち昇つてゐるのだつた。

カムボジャ王が燒かれてゐる！

何處か郊外の方から、フランスの吊禮砲が殷々と鳴りどよめいて來る。

然り、シソワット王がいま荼毘にふされてゐるのだ。但し、既に一束の骨だけとなつた王の遺骸なのである。小さな燃木と導火索とで、火をつけたのが新王モニヴォンであつた、

廻廊の小さな塔の中で、音樂隊の演奏が始まる。軍樂隊がラマルセイユを始めると、カムボジャ獨得の鄕土樂團が、シロフォンや打樂器でこれに和する。

地上に泣き伏してゐる農民の一團がある。あちらにはまた一心に祈禱を捧げてゐる婦人の一團がある。みな純白の喪服をつけ、髪をおろしてゐるが、若いのも年とつたのもいろいろである。特別に警衛のついてゐる一劃の敷物の上に跪づいてゐるのだ。これは今、灰となりつゝある故王の側女

たちで、その數は三十二人あつた。

大官たちを乘せた自動車が相踵いで走り去つた。中年の好紳士に見える新王モニヴォン殿下も內苑を立ち出でた。尖つた帽子を被つた八人の使丁が擔ぐ黑塗りのお轎に乘つて行くのだが、まるで敷滿團位の大きさの轎である。黑い大きな日傘の下で、殿下は上機嫌に太い葉卷をくゆらしながら門外へ搖られて行つた。

正面通路の前に、左右二本の白い小型の塔があるが此の意味は私には最初から解しかねた。ところが今見ると、その塔の上に白衣の男が一名づつ、やはり白色の尖り帽を戴せたのが現はれて、居合はした群衆に、小錢や檳榔子の實を投げ始めた。ワッといふ歡聲が揚る。いち早く日傘を仰向けに構へてゐる者もある。たちまちにして前庭は濛々たる砂塵で掩はれてしまつた。吊禮砲はまだ鳴り續いてゐる。

日が落ちて夜になつたが、まだ相變らず故王の遺骨は燃えてゐると見え、灰白色の煙が骨壺から立ち騰つてゐる。此の舞臺は確かに豪華な演出だつた。

式場の建物一切に、數百の電燈がぱつと輝やいた景觀は、まるで何かの展覽會のやうでもある。表玄關には煌々とした電燈の光の環がうづまいてゐる。だが、白煙をあげてゐる骨壺を安置した赤い高いお堂は、夜色の深まるにつれて一層莊嚴の氣を加へ、ちやうどばら色の透明な、水晶の大き

な塊りのやうに、夜天の下につき立つてゐた。その中に、縷々として立ちのぼる白煙を眺めても、もう一切の地上的な悲哀は感ぜられない。煙霞の向ふに見る夢の繪のやうに、超地上的な、天國的な幻影を見る思ひがしたのである。

故王の靈はもはや現實の世界から解放されたのである。從つて、哀傷し、追悼する理由はもはや無いのだ。大きなグンスホオルでは、頭と頭とが押し合つてゐる。樂隊が賑やかに伴奏をやつてゐる。舞姫(ダンサア)が登場する。その中にはやつと十歳位と思はれるやうな、ひどく可愛いゝ少女もゐる。顏はまつ白に塗られ、唇はまつ赤(か)に、自然のまゝの黑さを殘してゐるのは双の眼ばかりだつた。どれもこれも、キラキラする古代シャムの裝身具をつけ、尖つた冠帽を戴せてゐる。舞姫たちは、膝をついてくるりと廻り、すつくと立つて、美しい姿勢(ポオズ)をしたり、兩手をぐつと折り曲げたりして見せる。

つい眼の前に小さな影繪芝居の可愛いゝ人形が見えたので、もつと近づいて見ると、なかなか大規模な設備で、舞臺はちやうどラマアヤナ*の一場面を演じてゐるところだつた。

*ラマアヤナはインドの國民的敍事詩で、ヴイシユヌ神の化身となつた英雄ラアマを描いたものである。ヤソ紀元前三、四百年頃の作と傳へられる。

ラアマとラヴァナの戰鬪が始まり、ラアマの夫人シタが、セイロン島へ連れ去られるところである。そこへ猿の神樣ハヌマンが現はれ、敵の箭(や)を防ぐ盾をかざした戰車が轉がり出る。戰士を乘せ

た象の一群とそれを指揮する英雄ラアマ自身。既に一時間も前から、影繪芝居は此の神代の戰鬪を次々と展開してゐるのだ。ごく微細な點まであますところなく寫し出される影繪の人物は、獸皮を巧みに截り拔いたもので、大きさが約一平方米。登場の人物には數人の使ひ手がついてをり、舞臺面を緣(ふち)どつた紗の枠の後ろでこれを操つて巧みに活動させるのである。明るい灯(ひ)は舞臺の背後、つまり影繪をうつす幕の向ふにある。これが、影繪芝居の全貌で、今日ではシャムや交趾支那でも映畫に壓倒されてめつたに見ることの出來ないものと成つてゐる。

廣い葬儀場内はどこも滿員の人だかりだ。みな興奮して其處ら中を見物して歩いてゐる、內苑の方で笛を吹いてゐる者もある。王子たちや僧侶によつて飾られた祭壇の美しさに、眼を瞠る者もある。中には歐羅巴風の電飾なぞをつけて少し滑稽に見えるのもあるが、大部分は美しい上品な趣味でよく纏つてゐる。盆栽、花瓶、佛陀像、燭臺——何れも結構なものばかりだ。お骨を燒いたお堂の中にも、いろいろと趣向が凝らしてあり、今は天上に歸つた王樣の生前を偲ばせる場面が、パノラマのやうに次々と繰り展げられてゐる。村の平和な生活、米搗き、大きな花をつけてゐる木々。森の中で大きな蛇を覗つてゐる獵師。數百の小さな舞姫たちが芝生のテラスで踊つてゐる娛樂殿の情景。しかも大勢の音樂隊の女達が、太鼓、クラリネット、銅羅なぞを抱へて岩の周圍を囃し立てながら廻つてゐる光景もある。さうかと思ふとひどく近代的なのがあつて、本物そつくりの鐵道列車が玩具のやうに走つてゐるのもある。停車場の傍には小さな蒸汽艇が浮び、それが本物の泉水の

上を走つて、泳いでゐる魚を驚ろかせてゐる。見物の群衆はみな驚嘆するばかりだ。

正面の通路の前に建てられた純粋に支那式の大殿堂の中では、いよいよ荘厳に、儀式が續行されてゐる。此處には黄衣を纏うた五人の僧侶がをつて、午後からまつたく立て續けに、鎭魂の彌撒をやつてゐるのだ。中央に跪坐する一番長老の僧は、まるい頭に頭巾を戴いてゐる。五人の僧の献身的な態度と無我の境に入つた讀經とに、眞に胸を打つものがあつた。祈念を凝らすとき、彼等は殆ど眼を開かない。讀經の合間に、嚴そかな銅鼓が鳴り、太鼓が輕く響く。

此の支那風のお堂には、素晴らしい刺繍、繪卷物、香爐、吊燈籠なぞが所狭きばかりに陳列してある。さうしてその間にはまだ、數十幅の紙本畫がかけてある、逝けるシソワット王への祭贄だつた。尙武の氣を眉宇に湛へた將軍や兵士を始め、農民もあれば舞姫もあり、中にはお伽噺の世界を描いたのもある。そのほか、紅鶴に跨がつた五人の女を描いたものも見え、大きな燈籠の横から幻想的な騎乘者が一人ぶら下つてゐるのもある。何れも藝術的に大した技倆のものだつた。その他、精いつぱいの愛嬌をふり撒いてゐる舞姫の並んだ素晴らしい模型劇場。運轉手が把手を握つてゐる自動車、樂しさうな家族のゐる四階建ての住宅、旅客を滿載した三重甲板の蒸汽船。

どれもこれも、故王の靈のお供をして別の世界へ行く品々ばかりである。

五人の僧が祈念に專心してゐるところから、一條の白い麻布を敷つめた廣い通路が一つの祭壇へ

通じてゐる。この祭壇は夕暮れになつてから始めて庭内に建てられたものだ。此處に天體觀測者が一人恐ろしい顏で五人の僧の方を見おろしてゐる。これも紙の張子細工だが、その美しいことは古い支那燒きの陶人形のやうだ。その前にもう二基、神話めいた像が立つてゐる。一體は白色の馬頭人間、一體は鹿頭の人間だつた。

銅鼓が鳴りわたる。一人の召使ひらしい男が、勇ましい顏をした將軍を一個、堂内から擔いでき て、此の野天祭壇の傍で燒いてゐる。鎭魂の彌撒は次々と進行する。太鼓が轟いたと思ふと、今度は紅鶴に乘つた五個の女人像が擔ぎ出されて、順次に焰と化して行く。鎭魂の祭儀は更に進む。幾つかの僧侶像が灰色に疲れきつて、各々の座によろめきながら擔ぎ出され、一體又一體と炎上してゐる。これ等はみな、王の靈に扈從して彼岸へ上る犧牲の表徵なのである。夜半近く、もう一度太鼓と銅鼓の轟音が湧き上つて、農村風景や、旅客を滿載した汽船、美しい舞姫の踊る小さな舞臺等々のパノラマが次々に焰の中に消えて行く。

ひしめき合つてゐた見物の群衆もいつの間にか四散し、内苑はひつそりとなつた。

たゞ一つ、故王の遺骨だけが、あの魔法のやうなお堂の中で燃えつゞけてゐる。

明朝は早く、新王モニヴォン殿下がお見えになつて、灰の中から特別の骨がらを拾ひだされることであらう。そしてその骨がらを改めて寺に安置するための嚴かな祭儀も、それに引續いて執行されることであらう。（完）

昭和十八年二月十五日　初版印刷
昭和十八年二月二十一日　初版發行　（三五〇〇部）

（出文協承認
あ280232號）

アジアの旅
（定價金三圓）

著者　濱野修
東京市小石川區大塚坂下町一〇二

發行者　森谷均
東京市小石川區指ケ谷町一四六

印刷者　大森清一

配給元　日本出版配給株式會社
東京市小石川區大塚坂下町一〇二

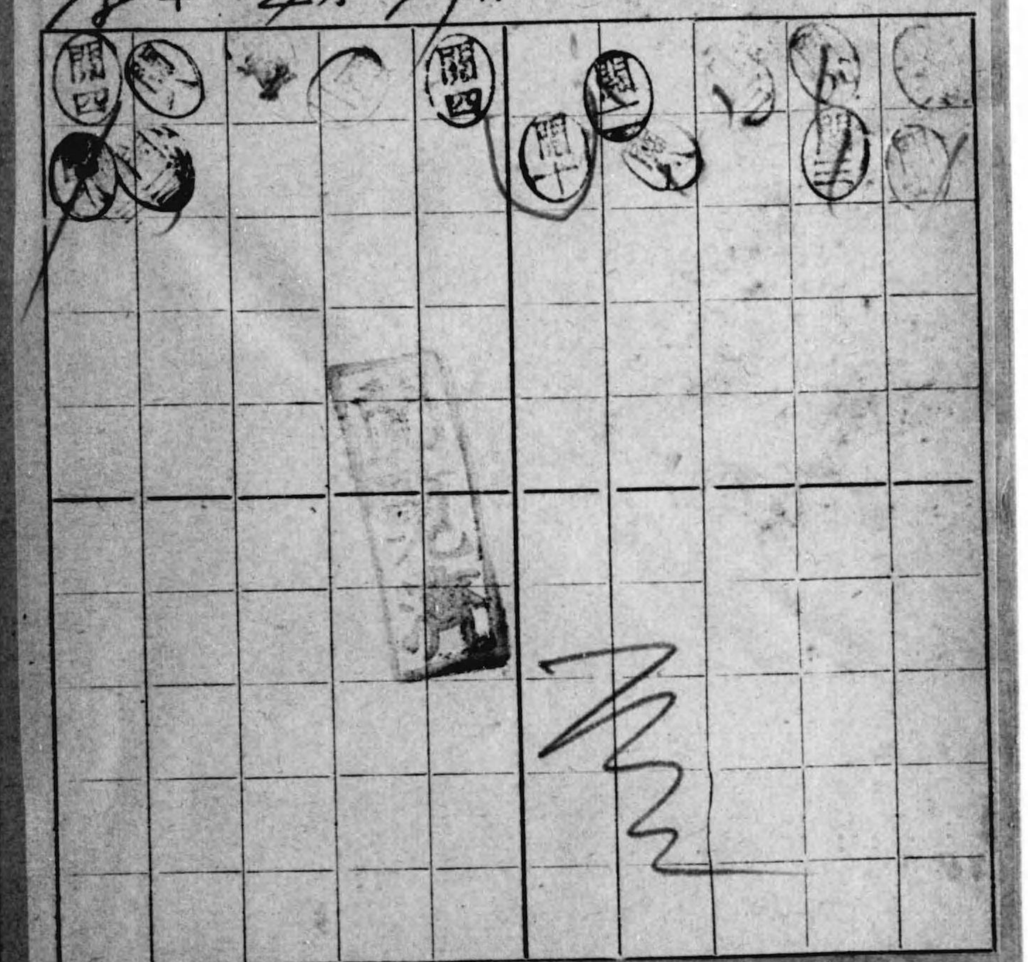
發行所　昭森社
會員番號一一二一二七番
電話神田(25)五〇三六番
振替口座東京四六九六番

妻と日本人	ハインリヒ・ヤコーブ 伊東鉄太郎譯	（長篇小說）	一・六〇 一五〇
昨日も明日も	ヴィッキー・バウム 鹽谷太郎譯	（長篇小說）	二・五〇 一五〇
微風の中の死	アレキサンデル・カステル 鹽谷太郎譯	（長篇小說）	一・八〇 一五〇
若き日の夢	ラマルティーヌ 櫻井成夫譯	（長篇小說）	二・三〇 一五〇
幸薄くとも	ウィラ・キャサァ 宮西豐逸譯	（長篇小說）	一・八〇 一五〇
宿命	モオリアック 原百代譯	（長篇小說）	一・五〇 一五〇
半月手帳	シャルル・ペギイ 平野威馬雄譯	（エッセイ集）	近刊
アラベスク	アンドレ・モオロア 平野威馬雄譯	（アラビア紀行）	一・八〇 一五〇
知と愛の生活	アンドレ・モオロア 永井直二譯	（エッセイ集）	一・八〇 一五〇

東京市小石川區大塚坂下町
昭森社
振替口座東京四六九六番

946
311

18 年 4月 13日



終